

2 熱田神宮周辺に見られる歴史的風致

2-1 はじめに

熱田は、名古屋台地南部の熱田台地南端に位置し、かつては眼下に伊勢湾を望む風光明媚な場所であった。古墳時代、この地には、尾張・美濃にかけて一大勢力を誇った尾張氏が断夫山古墳（2-エ）を築き、以後、古代・中世にかけて尾張南部における一大拠点として栄えた。現在、断夫山古墳は熱田神宮の管理下に置かれ、断夫山古墳の南にある白鳥古墳（2-オ）とあわせて御陵墓祭（2-エ）が行われている。

熱田神宮は、草薙の剣を御神体とする熱田大神を主祭神として祀り、境内には戦後の造営による本殿（2-ア）を始め、貞享3年（1686）に修理や新築されたという清雪門（2-イ）、南新宮社（2-ウ）など多数の建造物がある。神剣還座の故事に関連する神事である酔笑人神事（2-ア）、神輿渡御神事（2-イ）や、皇居から勅使をお迎えして行われる例祭（熱田祭）（2-ウ）など、境内では一年を通して多数の祭典・神事が行われている。

なお、熱田神宮境外の摂社・末社においても伝統的な行事が続けられている。大高にある摂社・氷上姉子神社（2-カ）に隣接する斎田では御田植祭（2-オ）が行われている他、摂社・高座結御子神社（2-キ）や鈴之御前社（2-ク）では、例祭（2-カ、2-キ）が行われ、多くの市民が訪れている。

古くから熱田神宮の門前町であった熱田には、神職や社を支える人々などが住み、伊勢湾の豊かな恵みを享受しながら、町場を形成していった。町の発展とともに、民衆の力も蓄積され、中世には南新宮社（2-ウ）の祭りに合わせて、大山や車楽といった山車を出す華やかな祭りが行われるようになった。

熱田の町は、中世末期には、織田信秀・信長の庇護を受け、近世には、東海道の宿場が置かれて多くの人々で賑わった。名古屋城下町とは本町通（熱田みち）で結ばれ、熱田の町の範囲は徐々に広がっていったが、明治時代に至るまで、熱田は城下町とは一線を画した独自の発展を続けた。明治40年（1907）、名古屋港の築港を契機に、熱田は名古屋市と合併し、以後、城下町であった地域とともに名古屋市における二大拠点として、大都市名古屋の形成に影響を与えた。

2-2 熱田神宮と摂社・末社等^{注1}の歴史的建造物

1) 熱田神宮境内の歴史的建造物

熱田神宮^{あつ た じんぐう}は熱田台地の南端に位置し、草薙^{くさなぎ}の剣^{つるぎ}を御神体とする熱田大神を主祭神として祀り、草薙の剣にゆかりの深い五座^{まいどの}の神を相殿^{まつ}として祀っている。その歴史は古代にまでさかのぼり、境内では長い伝統をもつ神事が続けられている。

熱田神宮は名古屋市民をはじめ多くの人々の崇敬を集め、特に新年の初詣には多くの人々が参拝に訪れる。また、結婚式や

七五三など、人生のハレの場として熱田神宮を訪れる人も多い。

熱田神宮の創祀^{そうし}については、次のような物語が伝えられている。

『古事記』や『日本書紀』の物語によると、第12代景行天皇^{けいこう}の皇子日本武尊^{やまと たけるのみこと}は東征の際、伊勢神宮に立ち寄って三種の神器の一つ天叢雲剣^{あめのむらくものつるぎ}を拝受した。駿河の国においては神剣の力をもって受難を免れ、以後草薙の剣と称したという。東征の帰途、日本武尊は尾張国^{おわりくにのみやこ}造家^{むすめ みや す ひめのみこと}においてその女の宮簀媛^{みすめ}命^{ひめのみこと}を妃とした。さらに伊吹山に向うに際して剣を妃の許に留め置いたが、都に帰る途中に伊勢能褒野^{の ぼ の}で亡くなった。その後、剣は宮簀媛命^{みすめ}によって熱田の地^{はうさい}に奉斎された。これが熱田神宮のはじまりと伝えられている。

一方、熱田神宮に関する古い記録としては、天武天皇の時代に宮廷に留め置かれた草薙の剣が朱鳥元年^{しゅちょう}（686）、熱田に還座したことをうけて、『尾張国熱田太神宮縁記』（年代不詳）には「それより以来、始めて社の守りとして七人を置き一人を長となし六人を列となす」と記されており、この時代に神社の神職制度が整えられたことが伝えられている。

熱田神宮の境内は約 19 万㎡の広さがあり、その社叢^{しゃそう}は神苑^{しんえん}であると同時に、尾張地方における数少ない常緑広葉樹林のひとつである。境内には本宮をはじめ、別宮 1 社、摂社 8 社、末社 19 社が祀られている。

境内には本殿のほかに戦災を免れた歴史的建造物や、戦後の整備で移築されてきたものが多数ある。



写真 2-2-1 初詣の賑わい

注 摂社・末社：主祭神に関連のある神様をお祀りする社（摂社）、それ以外の神様をお祀りする社（末社）

境内の歴史的建造物としては、貞享^{じょうきやう}3年（1686）に修理や新築されたという清雪門^{せいせつもん}、南新宮社本殿^{にしがくしよ}、西楽所がある。この他、記念碑・石造物としては、織田信長が桶狭間の戦いに大勝したお礼に寄進したとされる信長塀^{のぶながべい}、信長に仕えた御器所城主佐久間盛次の四男大膳亮勝之^{だいぜんのすけかつゆき}が寄進した佐久間灯籠^{さくまどうろう}（高さ7.44m、寛永7年（1630）庚午^{こうご}5月寄進）、永正10年（1513）あるいは12年に新造されたという二十五丁橋^{にじゅうごちやうばし}などがある。また、境内に移築され、保存・活用されている建造物には、旧名古屋博物館品評所の龍影閣^{りやうえいかく}や合掌造の原形ともいわれる又兵衛^{またべえ}（いずれも登録有形文化財）などがある。なお、戦前には、正門（南門）の海蔵門^{かいぞうもん}（西楽所の南辺り）と西門の鎮皇門^{ちんこうもん}が国宝に指定されていたが、惜しくも戦災で焼失した。

熱田神宮境内への主要な入口は、南門（正門）、東門、西門の3つである。各門には鳥居が立つ。境内のほぼ中央に第二鳥居と手水舎があり、それぞれの門から入ってきた参拝者はここで合流し、本宮へ向かう。手水舎のすぐ北側には、樹齢千年といわれる大楠があり、参拝者を迎える。境内にはこの他にもクスノキの大きな木が各所に見られる。

この他境内の諸施設としては、例祭に勅使をお迎えする勅使館、神符守札授与所を併設する神楽殿、祈祷殿、斎館、会館などは、各種の神事・祭典や行事に使用される。文化殿には熱田神宮宝物館や熱田文庫などが入る。熱田神宮宝物館は、博物館として登録されており、学芸員を置いて特別展や平常展を行っている。また、境内には6軒の茶室があり、毎月15日の月次茶会に利用されている。



写真 2-2-2 茶室「蓬庵」
（写真提供：熱田神宮）



写真 2-2-3 熱田の杜

2-ア 本殿

熱田神宮の社殿は、古代から造営が繰り返されてきたことが様々な史料から明らかになっている。『熱田大神鎮座記』（年代不詳）には、朱鳥元年（686）に天武天皇の勅命によって神剣が熱田に還座された際、改めて大宮や別宮諸神社を造営したことが記されている。また、室町時代には足利義持、義政、^{よしたね}義植の各将軍が造営を行った。元亀2年（1571）には織田信長が修造し、海蔵門を新造したとされる。天正19年（1591）には豊臣秀吉が、慶長5年（1600）には徳川家康がそれぞれ修理を行い、慶長の修理の際には西門である鎮皇門が造営された。



熱田神宮蔵

図 2-2-1 「熱田神宮古絵図」文化5年（1808）
（享禄2年（1529）頃に描かれた古図を模写したもの）

しかし、徳川家康の造営後、17世紀中頃には境内が荒廃した。この様子は松尾芭蕉の「野ざらし紀行」にも、「社頭大に破れ築地はたふれて草むらにかくる。…」などと記されている。これについて、当時の大宮司などは、幕府に対して造営修復の請願を続け、^{じょうききょう}貞享3年（1686）、5代将軍綱吉の支援を得て修理が実現した。清雪門、南新宮社本殿、西楽所など、現在、戦災を免れて熱田神宮に残る建物の多くはこのときに修理や新築されたものとされる。

明治26年（1893）、熱田神宮の社殿は、伊勢神宮にならって従来の尾張造から神明造に改められた。

その後、大正、昭和初期にかけて大規模な造営が行われ、本宮をはじめ別宮摂末社に至るまで修築がなされるとともに境内の拡張整備が行われた。しかしながら、これらの旧社殿は第二次世界大戦でほとんどが焼失してしまった。



写真 2-2-4 熱田神宮の社殿（中央奥が本殿）

現在の本殿は戦後の造営によるもので、伊勢神宮内宮の古正殿の譲渡を受け、昭和 30 年（1955）に完成し、11 月 11 日には本宮遷座祭が行われ、その様子は翌日の新聞記事となっている。

戦後の造営は昭和 24 年（1949）から始まり、昭和 50 年代まで続き、拝殿、勅使館、摂末社や文化諸施設、広場などが整備されて、ほぼ現在の姿となった。（⇒ 2－い 神輿渡御神事、2－う 例祭（熱田祭））

2－イ 清雪門

清雪門は、末社 楠御前社の北東にあり、もと別宮の東門、本宮の北門とも伝える。両袖には築地塀が一部残っている。俗に「不開門」といわれ、何百年来かたく閉ざされたままとされる。天智天皇 7 年（668）に新羅の僧が神剣を盗んだとき通った不吉の門とも、神剣還座の際に門を閉ざして再び皇居へ移ることのないようにしたとも伝える。清雪門は、昭和 38 年（1963）に解体修理が行われ、屋根の桁受皿斗に「貞享三年（1686）寅六月十七日、遠州浜松浅原庄右衛門」とある墨書が発見されている。浅原は貞享の修理のときの大工の名である。清雪門は、戦災を逃れて残った数少ない建造物のひとつである。（⇒ 2－あ 酔笑人神事）



写真提供：熱田神宮

写真 2-2-5 清雪門

2－ウ 南新宮社

南新宮社は熱田神宮の境内にある摂社で、素盞鳴尊を祀り天王社と呼ばれて人々に信仰されてきた神社である。現在は本殿のみが残り、西面している。南新宮社本殿は、一間社 流造で、主柱上に舟肘木、庇は連三斗で、妻には虹梁の上に撥束を置く建物である。貞享 3 年（1686）修復の記録がある。神宮内にあって、切妻造・朱塗りを残していることから長く歴史に残る建造物といわれている。（⇒ 2－う 例祭（熱田祭））



写真 2-2-6 南新宮社本殿

2) 摂社・末社等の歴史的建造物

熱田神宮の近くには、断夫山古墳や白鳥古墳といった大型の古墳が残されている。これらの古墳には古くから、熱田神宮創始の神話に登場する宮簀媛命や日本武尊の御墓との伝承がある。また、熱田神宮にゆかりの神社（摂社・末社）は、緑区大高など熱田から離れた地にも祀られている。これらの古墳や神社では今も伝統的な行事が続けられている。

2-1-1 断夫山古墳（史跡）

断夫山古墳は東海地方最大級の大型前方後円墳で、6世紀前半に尾張氏によって築造されたと考えられている。全長は約 150m で同時期の古墳としては、国内第 2 位の規模を誇り、昭和 52 年（1987）に史跡に指定された。熱田台地西縁に位置し、古墳時代当時は眼下に迫る伊勢湾を見渡す立地であった。古墳の被葬者や詳しい構造は分かっていないが、古墳や残された円筒埴輪の規模などから被葬者は、尾張や美濃にも影響力を持ち、大和王権にも近い存在であったと推定されている。

断夫山古墳は、古くから熱田神宮創始の神話に登場する「宮簀媛命の御墓」との伝承がある。古墳への人の立ち入りは禁じられてきたが、かつては毎年 3 月 3 日のみ登ることが許されていたという。その様子を描いた、『尾張名所図会』（天保 15 年(1844 年)）には、古墳に登る人々の奥に伊勢湾が描かれ、台地の縁辺部に築かれた古墳からの旧景を^{しの}偲ぶことができる。（⇒2-1-2 御陵墓祭）



写真 2-2-7 断夫山古墳（史跡）

2-オ 白鳥古墳

断夫山古墳の南約 400m のところには、白鳥古墳がある。断夫山古墳と同じく熱田台地上に築かれた前方後円墳（全長約 70m）である。『尾張名所図会』（天保 15 年(1844 年)）には、天保 8 年（1837）の大風で古墳の一部が崩壊し、多数の副葬品が出土したことが出土遺物の絵図とともに記録されている。白鳥古墳は、日本武尊が死後、白鳥に姿を変えて飛び立った伝説に由来するとされている。（⇒2-エ 御陵墓祭）

2-カ 氷上姉子神社

氷上姉子神社は緑区大高町の氷上山と呼ばれる丘陵地にあり、日本武尊の妃であったとされる宮簀媛命が祀られている熱田神宮の摂社である。寛平 2 年（890）の『尾張国熱田太神宮縁記』には次のような物語が伝わる。

日本武尊は東征に向かう途中、氷上の尾張氏の館を訪れ、そこで宮簀媛命と契りを結んで東国へ旅立った。日本武尊は尾張に戻った後、しばらく宮簀媛命のもとに留まった。日本武尊の死後、宮簀媛命は預かっていた草薙の剣を熱田の地に移して奉祭した。宮簀媛命の死後、尾張氏の旧里である氷上の地に宮簀媛命を祀る祠が建てられた。これが氷上姉子神社の始まりという。

氷上姉子神社に関する記録としては、『延喜式神名帳』（延長 5 年(927)）に「氷上姉子神社」、『尾張国本国帳』（宝永 4 年（1707 年)）に「従一位上氷上姉子天神」とある。また、氷上姉子神社周辺には熱田神宮の末社である元宮、神明社、^{もとみや}玉根社がある。このうち元宮は、^{たまねしや}仲哀天皇 4 年（195）に氷上姉子神社が創設された場所とされている。その後、氷上姉子神社は、持統天皇 4 年（690）に現在地に遷座されたという。このほか、



写真 2-2-8 氷上姉子神社

近くには^{いつきやま}斎山古墳があるが、被葬者など詳細は不明である。

『熱田神宮とその周辺』（昭和 43 年（1968））によると、現在の本殿は、明治 26 年（1893）に熱田神宮の新造にあたって別宮である八剣宮の本殿を移したものとされている。一間切妻造で、円柱の床下部は八角形で八角柱上に台輪を組んでその先を延ばし、この台輪上に円柱が立つ。床構造は熱田神宮の土用殿と同じであるが、移築に際して木階や縁を取り付け、一般社殿のように改造されていると推測されている。（⇒2-オ 御田植祭）

2-キ 高座結御子神社

高座結御子神社も熱田神宮の摂社のひとつである。尾張氏の系譜に名を連ねる高倉下命を祀る。『延喜式神名帳』（延長 5 年(927)) に記された長い歴史を有する神社である。

境内は昔から高座の森として知られ、本社のほかに熱田神宮の末社である銚取社、新宮社、御井社、稲荷社が祀られている。本殿は、かつて織田信長も造営をし、蜂須賀家政が修理を加え、貞享 3 年（1686）に改築した等の記録があるが、戦災により焼失した。現在の本殿は、旧本殿に準じて復興されたもので、昭和 38 年（1963）5 月に竣工したものであり、現在の社殿が写った昭和 44 年（1969）の航空写真が残っている。（⇒2-か 高座結御子神社例祭）



写真 2-2-9 高座結御子神社



写真 2-2-10 高座結御子神社
(昭和 44 年（1969）の航空写真)

出典:名古屋市都市計画情報提供サービス

2-ク 鈴之御前社

鈴之御前社は熱田神宮の末社で、祭神は天鈿女命である。俗に「鈴の宮」といわれ、東海道の旅人が熱田に入るときは、この社で祓を受けてから本宮に詣でることになっていた。当社は戦災後、昭和 35 年（1960）に新たに社地を定め遷座された。（⇒2-き 鈴之御前社例祭）

本殿

本殿は一間社神明造となっている。

石柱

鳥居横には「昭和三十五年七月三十一日建立」と刻銘された石柱が建っている。



写真 2-2-11 鈴之御前社本殿



写真 2-2-12 鳥居横の石柱

2-3 熱田神宮と摂社・末社等における伝統的営み

1) 熱田神宮境内における伝統的祭礼

熱田神宮では古くより伝わる年間約 60 もの祭典と、約 10 におよぶ特殊神事が昔ながらの尊い手ぶりのまま今に伝えられている。

2-あ 酔笑人神事

酔笑人神事^{えようどしんじ}はオホホ祭ともいい、5 月 4 日の夜に行われる。天智天皇 7 年(668)に新羅の法師道行^{どうぎょう}により盗み出されたとされる草薙の劔^{しゅちよう}が朱鳥元年(686)に熱田の地に還座し、社中がこぞって歓喜笑樂したその様子を伝えるものといわれる。『熱田神宮史料』年中行事 編上巻(昭和 46 年(1971))に所収されている『文明十七年(1485)年中行事』の 5 月 4 日に「酔人御神事、色々儀式有」の記述があり、この頃には神事が行われていたことがわかる。

酔笑人神事は、見てはならぬと伝えられる神面を、袖に隠し持った神職が境内を巡り、決められた場所で大笑いする神事で、祝詞^{のりと}も神饌^{しんせん}もない特殊な神事である。この神事には 16 人の神職が参加する。衣装は立烏帽子に狩衣姿で、右手に笏^{しゃく}をもつ。神事では、神面を影向間社^{ようごうのましや}で袖の中へ受け取り、神楽殿前、八剣宮を巡った後、清雪門^{せいせつもん}で返納する。

まだ明るさの残る午後 7 時、16 人の祭員は一行に並んで授与所南にある祓所^{しゅばつ}へ進む。そこで修祓の後、影向間社^{ようごうのましや}に参進する。

影向間社に到着すると、祭員は笛役から神面を受け取る。面が祭員にわたり準備が整うと面役と呼ばれる 2 人は神前へ進み出て蹲踞^{そんきよ}し、まず正面を向く。祭員は、笛役を中心に内側を向いて半円陣状に立ち並ぶ。社殿に向かって右側の面役は、左袖に隠し持った神面を右手に持った中啓^{ちゅうけい}(扇の一種)で、3 回叩いて「オホ」と言い、今度は左の面役が同じく左袖に持った神面を 3 回叩いて「オホ」と言い、また右の面役が左袖の面を 3 回叩いて「オホ」と言う。つぎに面役は向き合って先程と同様に右・左・右の順で左袖の面を 3 回叩き「オホ」と言う。面役の所作が終わり、笛役が「ターロリー」と笛を吹くと、祭員全員がそろって大声で笑う。これを 3 回行くと影向間社の行事は終わる。祭員は左袖に神面を入れているので、左手を胸前にあて、



写真提供：熱田神宮

写真 2-2-13 酔笑人神事

列を正して影向間社を後にする。

影向間社を後にした祭員は、神楽殿前まで戻っていく。神楽殿前に到着すると直ちに面役が正面へ進み出て、祭員も所定の位置に並び、影向間社と同様な所作を行う。神楽殿前での酔笑人神事が終わると次は八剣宮に向かう。3番目の場所となる八剣宮でも先の2カ所と同様の所作で大笑いする。

最後に東面している清雪門(⇒2-イ清雪門)へ祭員が到着すると、南北一列に並ぶ。ここでは門に向かって左側の面役だけが、正面に進み蹲踞する。面役は、正面を向いて左袖の神面を3回叩き「オホ」と言い、これを3回繰り返して、笛役が「ターロリー」と笛を吹いた後、西を向いた祭員は大きな声で全員が笑う。ここでも3回大笑いをする。

大笑いが終わると笛役が神面^{はこ}の前に進んで蹲踞し、順に祭員から神面を受け取って^{はこ}の中へ納めるのである。その蓋を閉じると祭員は列を整え、参道を通して齋館まで戻り行事は終わる。

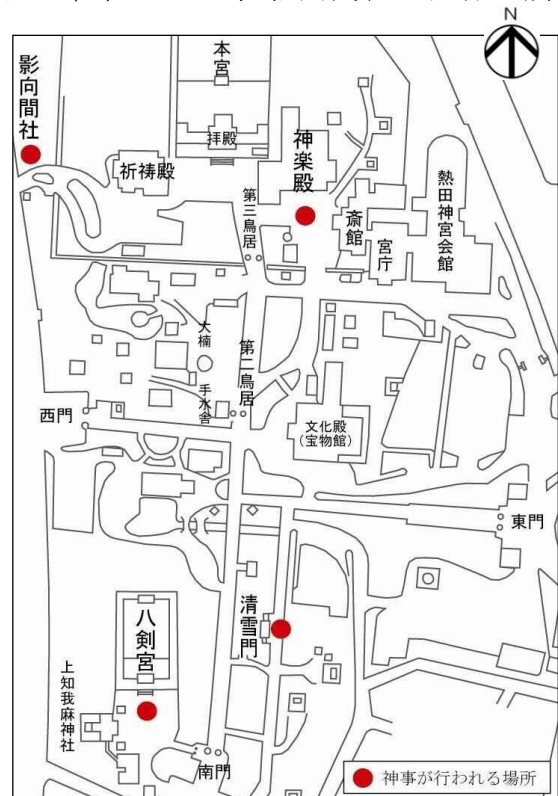


図 2-2-2 酔笑人神事位置図

2-1-い 神輿渡御神事

神輿^{しんよ}渡御^{とぎよしんじ}神事も酔笑人神事と同じく朱鳥元年(686)の神剣還座の故事に関連する神事で、5月5日に行われている。還座の際の「都を離れ熱田^{みゆき}に幸すれど、永く皇居を鎮め守らん」という神託にもとづいて行われている。古くは「神約祭」とも呼ばれていた。『熱田神宮史料』年 中行事 編上巻(昭和46年(1971))に所収されている『文明十七年(1485)年中行事』の5月5日には「...鎮皇門^{ちんこうもん}ニ御幸あり、」の記述がある。戦前は神輿が鎮皇門まで渡御して^{とぎよ}^{ろうもん}^{ろうもん}上^{ろうもん}に奉安され、はるかに皇居を望んで祭典が行われていた。鎮皇門は熱田神宮の西門で旧国宝に指定されていたが、戦災で焼失したため、現在は鎮皇門跡への神輿の渡御が行われている。



写真提供：熱田神宮

写真 2-2-14 鎮皇門(焼失前、当時は国宝)



写真 2-2-15 鎮皇門跡(西門)

神輿渡御神事が行われる
当日は、午前8時に権宮司
以下の祭員が斎館より参
進し、祓所において祓を受
ける。その後、本宮瑞垣御
門内の所定の座につき、
奉告祭^{ほうこくさい}を執り行う。権宮司
が御霊代^{みたましろ}をうつしたのち、
瑞垣御門内から退出して
奉告祭^{ほうこくさい}を終える。



写真 2-2-16 神輿渡御神事

午前 10 時、宮司以下の
祭員と神幸所役^{しんこう}が斎館よ

り参進し、祓所において祓を受けた後、拝殿の所定の座につく。宮司以下の祭
員は斎服^{さいふく}を、神幸所役は浄衣^{じょうえ}、禪^{ちん}、東游^{あずまあそび}などを着用している。次いで宮司
一拝の後、宮司は神輿の前に進んで祝詞を奏上する。

次に禰宜^{ねぎ}が召立文^{めしたてぶみ}を読み、神幸所役は召立につれて、それぞれ執物^{とりもの}を捧持し、
前陣、後陣の列次を整える。(⇒2-ア 本殿)

続いて発興^{ほつよ}となる。行列は表参道を出て国道 19 号線沿いに進んで鎮皇門跡西
門に到着する。神輿を中央にすえ、参列者は所定の座につく。ここでは、宮司
一拝、献饌^{けんせん}、祝詞奏上、神楽、礼拝などが行われる。

鎮皇門跡での神事が終わると、再び行列を整え発興となる。元の道筋を経て
本宮に還御^{かんぎょ}、禰宜の召立文につれて、執物を元の位置に戻し、参列者は所定の
座につく。ここで祭儀を行い、神事を終える。

2-う 例祭（熱田祭）

熱田神宮の例祭は 6 月 5 日に行われている。これは、皇居から勅使をお迎えし、御幣物^{ごへいもつ}の奉奠^{ほうてん}、御祭文^{ごさいもん}の奏上が行われ、熱田神宮において最も重要かつ荘厳な祭典である。

例祭当日は、午前 10 時に御幣物辛櫃^{からひつ}を先頭にして勅使以下、宮司をはじめとする祭員、総代の順に列次を整えて参進する。本宮の石階段下西側の祓所^{しゅばつ}において修祓の後、本宮に参進する。

本殿（⇒2-ア 本殿）は御垣内^{みかきうち}の一番奥に位置する神明造、銅板葺の建物である。その本殿の両側に、「東宝殿^{とうほうでん}」・「西宝殿^{さいほうでん}」がある。この御垣内に内から順に「瑞垣^{みずがき}」・「内玉垣^{うちたまがき}」・「外玉垣^{とのだまがき}」の垣があり、それぞれの垣の南正面には神明造の門がある。内玉垣と外玉垣との間の広場を「中重^{なかのえ}」といい、正面中程に立っているのを中重鳥居という。例祭をはじめ祭典の多くはこの中重で行われる。

例祭における本宮の祭儀は、開扉、献饌、宮司による祝詞奏上、御幣物の奉奠、勅使による祭文奏上、撤饌、閉扉、拝礼の順に行われる。本宮の祭儀には総代、各界代表、崇敬者代表が参列する。



写真 2-2-17 例祭

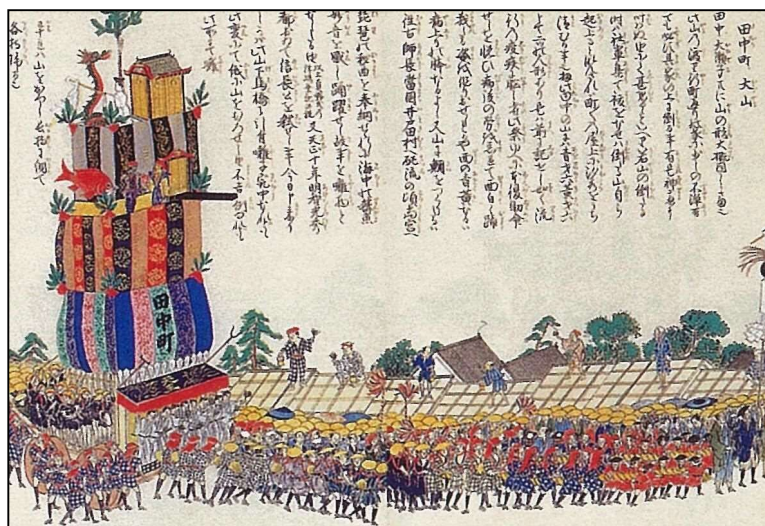


写真 2-2-18 熱田祭で奉納される神楽

例祭の行われる 6 月 5 日は、古くから南新宮社（⇒2-ウ 南新宮社）の祭礼（熱田天王祭）が行われている日であり、昭和 24 年（1949）から例祭もこの日に行われるようになった。現在も熱田神宮の例祭と同日に南新宮社祭が行われている。

寛政 2 年（1790）の写しが残る「八ヶ村祭礼之覚」によると、南新宮社の祭礼（熱田天王祭）は、寛弘年間（1004～1012）に疫病が流行したため、天王社の前で疫神を「旗鈴^{はたぼこ}」で祓ったことに由来するという。その後、文明年間（1469～1487）になって、祭りに山車が用いられるようになったという。天王祭に出される山車には、大山と車楽^{おおやま だんじり}の 2 種類があった。大山は 4 段の木組みからなり、高さ 12 間（約 21.6m）にも達したという大きな山車であり、山車の上では人形

芸能が行われた。一方、車楽は二階造の屋根上に^{やかた}屋形を乗せたもので、こちらでは稚児舞^{ちごまい}が演じられた。熱田では、大山や車楽を所有する八カ町（村）が当番を定め、毎年交替で山車を曳き出していた。



名古屋市蓬左文庫蔵

図 2-2-5 熱田大山祭り『熱田祭典年中行事図会』（江戸後期）

熱田天王祭は、宿場町・港町として発展した熱田の象徴的な祭りであったが、明治 30 年代になると町に電線が引かれ、形を変えざるを得なくなった。明治 39 年（1906）には、大山や車楽に替わって、熱田の浜に^{まきわらぶね}巻藁船が出されるようになった。明治 43 年（1910）からは 5 艘の船が出され、これは昭和 48 年（1973）まで続けられた。この間、大山と車楽のほとんどは戦災で焼失してしまった。その後、巻藁船は陸に上がり、現在は熱田祭の一環として熱田神宮の門前に設置される献灯まきわらにその面影を残している。

現在、献灯まきわらは 5 基が出されている。これらの献灯まきわらを担当する学区（小学校区）と設置場所・数は、白鳥学区が東門に 2 基、船方学区・千年学区が西門に 1 基ずつ、大宝学区が南門に 1 基である。このうち、船方・千年・大宝の各学区は堀川の西側に位置しており、熱田祭に関わる地域は、堀川の西側まで広がっている。献灯まきわらの点灯に従事する人々は、午後 6 時前、参道に列を整え、本殿に参拝して種火を受け



写真 2-2-19 献灯まきわら

取る。その後、各持ち場につき、1年間の12月と365日を表す提^{ちようちん}灯に順次灯を入れて、1時間ほどかけて献灯まきわらを完成させる。提灯に灯がとまり、辺りが薄暮から暗闇へと変わるところになると花火を目当てに訪れる人々で境内と熱田神宮周辺は埋め尽くされ、この日一番の賑わいとなる。花火は断夫山古墳のある熱田神宮公園から打ち上げられ、堀川沿岸や白鳥公園などでは、多くの人々が初夏の夜空を彩る花火を見上げる。

例祭では、献灯まきわらや花火以外にも、熱田神楽、尾張新次郎太鼓、棒の手、巻わらみこしなどが奉納されるほか、武道大会、献茶、献花など様々な奉納行事が行われる。これらの奉納行事には名古屋市内はもとより、市外からも多くの人々が参加して行われる。また、地元の白鳥学区、旗屋学区の各町内からは子供獅子が出され、次々と熱田神宮の境内に繰り込んで参拝が行われる。

その他、熱田神宮では次のように多数の祭典・神事が行われている。

時期	名称
1月1日	歳旦祭
1月7日	世 ^よ 様 ^{ためしんじ} 神事
1月11日	踏 ^{どうかしんじ} 歌神事
1月12日	封 ^{ふうすい} 水世 ^{よだめしんじ} 様神事
1月15日	歩 ^{ほしやしんじ} 射神事
3月17日	御 ^み 田 ^た 神社 ^{じんじや} 祈 ^き 年 ^{ねん} 祭 ^{さい}
5月1日	舞 ^ぶ 楽 ^{がくしんじ} 神事
5月8日	豊 ^{ほうねんさい} 年祭
5月13日	御 ^{おんぞさい} 衣祭
6月18日	御 ^み 田 ^た 神社 ^{じんじや} 御 ^お 田 ^た 植 ^{うえ} 祭 ^{さい}
6月30日	大 ^{おお} 祓 ^{はらえ}
10月17日	御 ^み 田 ^た 神社 ^{じんじや} 新 ^{にい} 嘗 ^{なめ} 祭 ^{さい}
10月中旬～11月中	七 ^{しち} 五 ^ご 三 ^{さん} 特 ^{とく} 別 ^{べつ} 祈 ^き 禱 ^{とう}
12月第3金曜日	農 ^{のうぎ} 業 ^{よう} 感 ^{かん} 謝 ^{しゃ} 祭 ^{さい}
12月25日	御 ^お 煤 ^{すす} 納 ^{おさめしんじ} 神事
12月31日	大祓

2) 摂社・末社等の伝統的祭礼

2-1え 御陵墓祭

明治9年(1876)以降、断夫山古墳(⇒2-1エ 断夫山古墳)は熱田神宮の管理下に置かれ、熱田神宮により、「御陵墓祭」が行われるようになった。昭和9年(1934)の『熱田神宮年中行事』によると、この頃には断夫山古墳で御陵墓祭が行われていたことが分かる。

現在、御陵墓祭は、熱田神宮の本宮にも祀られている宮簀媛命のゆかりを引き継いで、毎年5月8日に行われている。当日は熱田神宮の神職により古墳前で祝詞の奏上などが行われる。

また、熱田神宮では現在も白鳥古墳(⇒2-1オ 白鳥古墳)を日本武尊の御陵として断夫山古墳とあわせて御陵墓祭を行っている。



写真 2-2-20 御陵墓祭

2-1お 御田植祭

氷上姉子神社(⇒2-1カ 氷上姉子神社)では、熱田神宮と関係する伝統的な行事が行われている。

氷上姉子神社に隣接する大高斎田では、6月の第4日曜日の午前10時から、御田植祭が行われる。

かつて熱田神宮の斎田は他所にあったが、近代化の中で稲の収穫が困難となり、昭和7年(1932)に大高の現在地に斎田が定められた。

以後、熱田神宮に供えられる米はもっぱら当斎田で栽培され、納められている。

『大高町誌』(昭和40年(1965))によると大高斎田御田植祭は昭和8年(1933)に始まり、現在まで続けられている。御田植祭では、20名の男女が揃いの衣装を着て、田植歌に合わせて田舞を奉納し田植えが行われる。祭りの装束や田舞は古式ゆかしいもので、この時期の新緑と相まって彩り鮮やかに行われる。



写真 2-2-21 大高斎田御田植祭



写真 2-2-22 御田神社御田植祭

なお、大高斎田での御田植祭に先立ち、6月18日には熱田神宮境内の摂社のひとつである御田神社でも御田植祭が行われる。この神事は五穀豊穰を祈るものであり、祭主の祝詞奏上に次いで、陪従の笏拍子に合せて4人の早乙女の優雅な田舞が奉奏される。

2-1か 高座結御子神社例祭

高座結御子神社(⇒2-キ 高座結御子神社)の例祭は6月1日に行われる。この地域の夏まつりのはしりであり、地元の旗屋学区、高蔵学区の各町内から獅子が出される。高座結御子神社は、子育ての神としても知られており、境内は「井戸のぞき」で賑わう。井戸のぞきは、境内末社の御井社の井戸を子供にのぞかせ、その水を戴くと「虫封じ」の霊験があるといわれているものである。

7月の土用の入りには御井社祭が行われる。また、高座結御子神社では、子供が15歳になるまで神様に預けて無事に成育するようご守護をいただく「子預け」も行われている。



写真 2-2-23 井戸のぞき

2-1き 鈴之御前社例祭

7月31日の例祭には「茅の輪くぐり」の神事が行われる。鈴之御前社(⇒2-ク 鈴之御前社)の例祭は「夏越しの祓」として有名で、境内に設けられた大きな茅の輪を左・右・左と八の字にくぐってお参りすると、全ての罪・穢れ・災いから逃れられ、夏病みせずにより明るく健やかな生活を営むことができるといわれている。参加者は紙垂を付した芦を持ち、境内の大きな茅(ち)の輪を左・右・左と八の字にくぐってお参りする。



写真 2-2-24 茅の輪くぐり



図 2-2-6 熱田神宮周辺の歴史的建造物と活動および小学校位置図

2-4 まとめ

熱田神宮の年中行事には、農作物の豊凶を占う神事や、招福・除災などを祈願する神事が多くある。これらの神事には現在も多くの人々が訪れ、民衆もその一部に参加できる行事もある。神事を見守ったり、そこに参加したりする民衆の様子からは、これらの神事に人々の願いや祈りが込められていることを窺うことができる。また、舞楽神事は、西楽所で奏される雅楽の調べと古式ゆかしい舞振りが王朝絵巻を思い起こさせ、拝観者をみやびな世界へ誘う。

熱田神宮ゆかりの古墳や神社では、今も伝統的な行事が行われている。これらの古墳・神社では、熱田神宮にまつわる神話や地域の歴史に触れることができ、そこで行われる恒例の神事は、厳かな雰囲気や季節感を感じさせるものとして人々に親しまれている。

このように、熱田神宮境内、摂社・末社等からなる熱田神宮周辺では、現在も市民が参加する多くの神事が営まれ、良好な歴史的風致が形成されている。



図 2-2-7 熱田神宮周辺に見られる歴史的風致の範囲